



忠婦
美談

薄衣草紙

一

厚百五十六番

六冊

光文堂

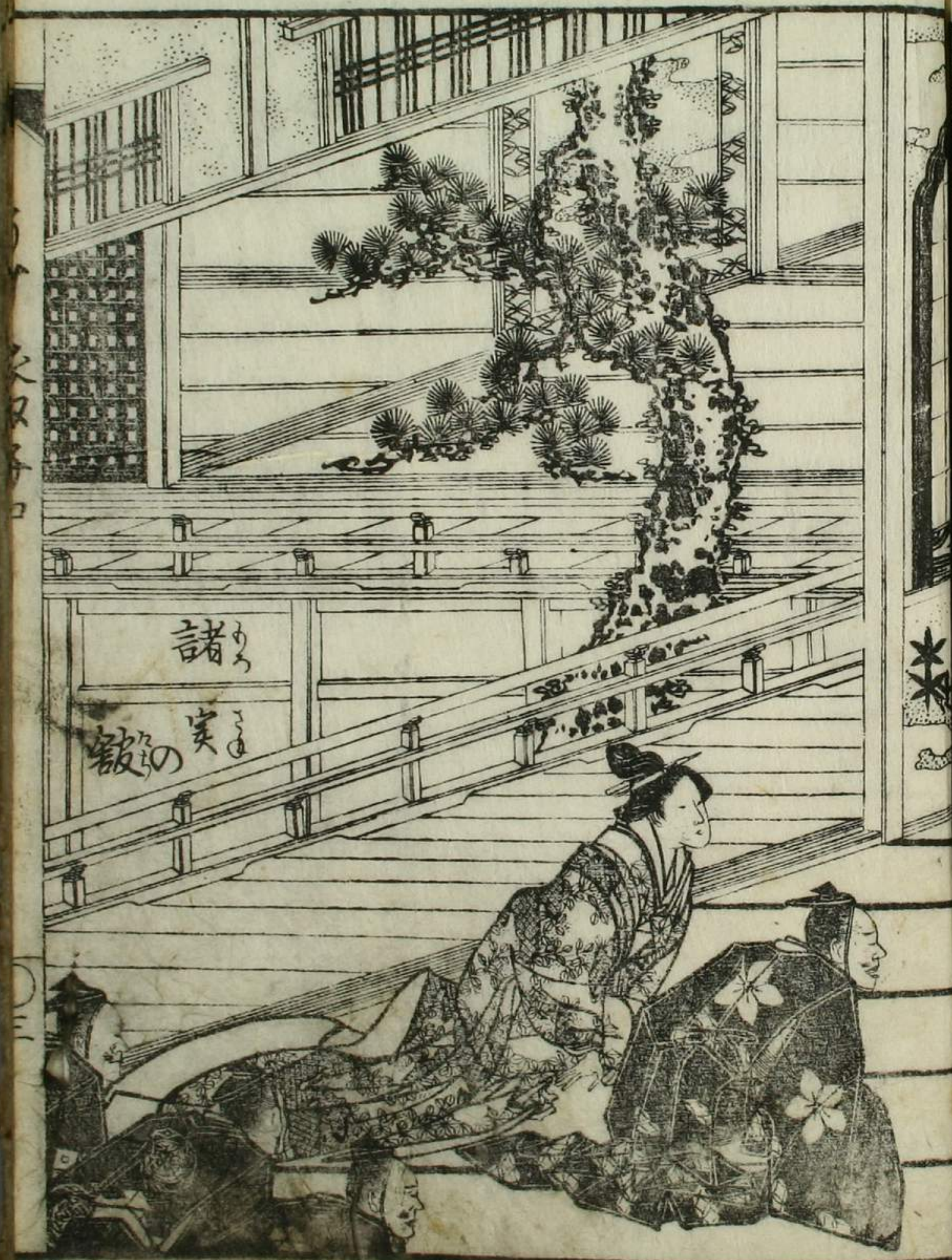
手紙
光文堂
明治
三十三年
三月

特
3遠
959
1



ちりぢり
 心揺れ
 おもひけ
 人の袖に
 こころ
 あり





第一	寄木薄命
第二	寄火奇難
第三	寄土草舎
第四	寄金苦肉
第五	寄水觀喜
以上	

美談 薄衣草紙卷之一

津川亭著述

兼題

寄木薄命

夫仁者ハ己ガ寶ヲ守ル。人ヲ救フニ及バズ。不仁者ハ人ノ寶ヲ奪フ。己ガ財ヲ有シテ。人ノ財ヲ奪フ。有財有業。有業ハ有失トシテ。爰ハ人王六十九代後朱雀院の御宇と云。長曆の頃。公卿の中。梅里大納言橋諸實卿と云。都四條の西。梅里の里。其先祖を尋ル。人王三十代敏達天皇の後。胤玄孫。よつて五代。月井手左大臣。諸兄公。和洞二年。元明帝の。おん時。よめて橋の性。をみ。其子。右大臣。奈良。營。その孫。贈太政大臣。清友。代。統。今。大納言。諸實卿。その長成。諸實。

秀才ありて教諭の道は名たるものなり。和漢の書よりうらむと、かかれば上とさるる下と分る。惟るのらる深くおんせむ。敬慮あかるのせむは主上のおん学んえむいと愛しく愛するのひらる。北の方の花園右大臣雅行公乃の妹より茶藨の方と唱へ。おん粧ひとひ。おん正しく。妹と容のおん中陸よりせむのひぬ。備此館は二品の宝器あり。一は玉枝乃橋といひ。這也赤梅檀といふ。名はりて彫るせし。うかるは橋の枝あり。奇あるの彼枝のりてを押したるは橋の實おのづから三つ發け。清香四方は薫ぐ衣よとさる。その中は二箇の神仙暮て彫り。形状と彫刻より其面色さるがら流るがごとし。又指を寛けれは元の正しく小萎弱。この宝橋は元祖井出左大臣へ橋の性を賜ふ時等しく降受ある。その原は聖徳太子のおんとは。支那より和朝へ獻る。是也昆首謁磨が真彫りて。嵯峨秋ると同本同刻られた。仏粹は先達て渡り。大内よ止めぬ。壬午のじよ。かこの正しく流るる下し。ひぬ。二の宝は紫令の甲と唱へ。全粹は彫りて。痕あり。れども積年の器あるを。傍のそるの痕も跡あり。只彫刻の粹の残る。されど諸兄云の子。奈良麻呂のそる甲なれば。怨敵退散の守護神と崇め。この二器は當家累代の重宝なり。はるる秘め。是よりみぞ。のまごんごるのの雲間の月を予むがごとく。稀く人へ感賞よおふびり。其なるふ闕するもの。諸実卿不惑よ。絶遠るる。おんせむ。のまごんご世継の存。おんせむ。何圍るる。ぬおんせむ。春の庭よ花るる。らら。のひらる。別而茶藨の方へ。このを款くせむ。當所梅の宮へ。おんせむ。を運び一子を授けし。と。深く

新誓言いひなる。折々の梅の宮とやある。都四條の西梅津の里
小徳を申しきて。多る酒解の神。おび三座相殿より贈太政大臣
臣橘清友もびは檀林皇后嘉智子と祭。この皇后ハ嵯峨
天皇の愛妃ありしうとも。太子ありとを愁ひ多し。酒解の神小祈り
て。太子と隆誕し多しひぬ。今も母世の人。子を祈ふ。靈験著明と
なり。是去置茶藤の方。ある夜の爰。髪結する童子ありし
日。梅の宮の神使あり。おん牙一子と祈りありし。丹精あるゆゑ
ふ。是と授まわす。と宣ふと。おん花ハ中道散ると。さる枝
枝。短冊と結つけし。おのづから流るるありし。

春風は散るも花の香どの。土産もぞおて来ぬ梅が枝

とあり。爰もふ。是ハつる。神意をある。の下のさせありしと
是々。曉の鶏の声。おひる。爰もありし。後朝諸実卿ハ如斯くの
物語。一のハ。卿のさせありて。夫我おん身の誠を感念ありて。授け
たる。神祿あらん。細ハ散り梅を惜む。ゆゑおのり何ゆゑ。おの
神意。深るる。再度考へえ。傳ふ。されど何有。希願のありし。我
志。免るる。搦す。身を大い。ありし。とありしが。的南。その月
より。腰妊ありし。臨る。月。お安くと。玉小等。死姫を設させありし。二方
の。おん。欽びハ。更も。ひつ。氏族。家族。調。め。死。け。け。け。け。け。
家隸の郎黨。一。柔地。白人。が。妻。後瀬。ありし。その。年。三。す。
ありける。挿と。よ。娘。ありし。乳の。つと。太。ありし。け。け。け。け。け。
ま。よ。せ。り。儲。姫。の。おん。名。を。び。つ。め。せ。り。と。何。せ。り。ハ。諸。実。卿。の。
傳ふ。この。春。北。の方。ありし。梅の。宮。の。靈。を。よ。り。て。津。被。



姫と名づべしとありけり。茶藨の方でせめて其の神祕
こと今も何れも其の神祕はしるべし。君ありて悟りぬひて。姫
が名をその呼せしめりや。さればとよ神祕の下の子。はとあぞお
てとあり。あつればをとおする海とよむとあり。

なる風よりしるはる花のかごのまつとあぞおとせぬ梅が枝
が流るるととれに姫が名を神祕と号する。私るる神の神宮
すせたとまつりあり。殊に家室小甲の神も存しませば。ひとくこるる
毒めぐる名るるべし。と説せしめり。北の方をたぬ。有席人々感嘆よむ
り。されども梅の宮の霊夢へ諸実のめん月のうともやけしとよ。ゆ
ふのと籠もひて。北の方も明りぬる。されば新しき春秋
と引止む。紀の園もるけし。月日もつらつら。弓の矢継ぎも

年とあり。既當今に後冷泉院の知字。康平三年とあり。録りて神
被姫とや破氏とぞある。せめてひぬ実神ふりうさせめり。ひ姫るるを
その容きの教へぬ。ぬのつら。敷の道小賢く。管弦の業も妙なる
の。又君の教ふとぞひ。唐山の書をも一通の発賞。多と。顔色
あつて。柳の糸の強うぞ一様とぞある。ぞええさせめり。ひりれ
るも多侍女も撰りて附並り。中も。とけて老黨白人が女兒挿
も。其に十八才ある。とぞ。と多の容貌も。ねども。まき。挿るる風
俗も。あつて。その。又白人が力量を。て。烈しき生きたる。も
老孝のいと深く。二方の。吐ひ。す。や。姫君の兄弟の
あり。ひ。一方の。ひ。る。愛。中納言。為。俊。卿。とて
あり。其性温順。諸実卿と。已。断。琴。の。支。り。る。り。が。こ。

為俊卿の季の公達小義名若丸とて今年十七才ふるをせしむ。ひ
つむ初冠をすしむ。その色玉をのむむけ。美貌つらん。さるく。
あつゆ伶俐の生立ゆ多又為俊卿も格別寵愛申大うさる。殊
奇道はゆくさうさうむけ。當時此道小名さる。法実々々順ひ。花
月の兼頼月次の巾着席怠慢る。素より一を喫て十を喫の発
才也。今の中秀逸の餘情申誦ゆ多。諸実々々未頼母く必
多ひ茶藜の方也。此公達の容貌才智の衆小試り人をあう賞い多。
竊意よハこの若をえ清け。姫は妹齋合る。似夢一死縁る。あつと。
か袖いゆぐひのひられも。諸実々原よりさる。子の牛賣る。れを
憎も多。ゆよの忍びつ。おあ。後待せもひる。宜る。ゆ。清女が
言祭る。遠くて近きもの。男とさる。の想思の情とやらん。津被姫由

十六年の花らふ。美名若の容色よ多。ひと。し。思。の。情。は。る。
と。と。も。久。米。路。の。橋。の。よ。る。さ。も。る。く。あ。け。て。何。と。や。恥。し。く。珠。小
又母の園に。巖る。ま。眼。ふ。い。の。ま。の。情。も。ま。あ。く。の。ほ。ど。あ。ま。る。
若君の意中も。惜う。ぬ。月。の。影。さ。と。こ。の。こ。も。同。ト。ま。ま。の。い。や。
おひの捨が。富。と。浅。間。の。文。光。色。互。身。小。絶。ぬ。胸。の。煙。と。や
さ。ら。ん。姫。の。明。暮。こ。の。の。ま。り。ひ。つ。け。さ。の。糸。解。る。は。縁。
あ。り。の。り。ん。指。て。ら。臥。め。ひ。程。あ。ん。さ。の。こ。も。持。て。さ。て。お。ん。ひ
お。り。げ。る。を。貴。賤。の。隔。る。親。と。子。と。あ。い。の。情。添。け。れ。ば。
つ。つ。ま。も。あ。な。い。幼。見。と。さ。ひ。な。し。か。ら。勞。の。さ。ら。さ。へ。さ。と。も
え。つ。つ。せ。の。い。ど。医。師。小。作。せ。し。茶。を。ま。ま。せ。り。る。これ。と。揮。の。と
ハ。何。と。や。らん。覚。束。る。く。或。夜。姫。の。直。宿。よ。り。て。西。方。山。の。説。話。の



新山
の
景色

遠くねば。己らんと偶よりのひて。いとまひのひねと一向に連る
のひどの支度も厳らるゝで。竊く小被小顔とまのびつ。挿の外と
侍女とそも。多々々々。老黨ふの兼比白人と召連るひ。彼地より
川流どま。館の前。我後園と云。吳妻り。嵐の山の名のまふらう。
風も梢よ声とる。若竹ひとつ。萌りて。大堰川の流るる青
色と浮めて清く。笈翁の水ふらうら。花の影。棹と惜。八重
花王の雪と東ね。小似。枝おげ。咲つげ。落衣。残るり。
散果まとも。岩の屢せ。流るる。暮の春を惜める
あやとち。駒鳥の口達者。小晴り。鄙堂の声。諷する。一入のとやふ
すえ。暮るる。氣のつららん。渡月橋と越つ。彼所とん。都
鄙の老若。集會て。我と持。身と撫て。いと。述る。あれ。ば。我の糸。竹の

真とりのほぞあり。或の孫。言れ。梅の花と。お。さらん。と。嵐山。小。丈。竹。さ。
醉狂あり。或の若。鮎。汲んと。大井川。又。網と。さ。その。影。ひ。の。ま。ら。う。
己か。己。侍。く。ふ。く。佳。景。さ。と。て。綱。よ。尽。さ。ん。實。也。續。文。辭。よ。天。下。の。勝。
地。ハ。此。大。堰。川。又。過。さ。る。ら。ん。と。さ。れ。ば。北。の。方。姫。君。の。人。ら。ん。此。知。彼。外。と。
ん。あ。り。の。ふ。ら。ふ。山。の。半。腹。小。四。方。三。四。十。步。た。ら。ふ。と。芝。生。平。均。
小。夢。ま。じ。け。る。エ。と。た。不。あり。挿。の。ふ。つ。と。爰。ぞ。山。間。あり。日。新。目。映。り。う。で。
花。の。か。ご。も。繁。け。ま。ば。ふ。れ。懸。と。ころ。あ。ま。い。つ。と。休。の。せ。め。と。種。を。奪。り。せ。
提。重。の。甕。と。ひ。と。な。ぐ。初。め。あ。ま。い。せ。つ。う。ら。う。そ。と。真。あ。を。入。せ。め。ら。ひ。る。
北。の。方。の。宣。へ。の。結。序。と。し。ゆ。信。を。失。ふ。等。け。ま。ど。も。又。お。ひ。ま。へ。も。障。り。
から。る。の。の。う。ま。い。が。身。の。白。人。と。め。連。是。麓。る。大。悲。閣。へ。詣。り。ま。
ま。さ。入。姫。の。挿。と。偶。よ。の。知。り。昔。時。か。う。ら。ま。い。せ。め。ら。う。と。と。生。と。せ。め。ら。ひ。

言分今日赤繩を締むおろす有りん。美名若丸も嵐山ふたれせ
のひらがま下青侍と我まゆひつ。や此山の上中下三だんの道と
異しと渡月橋まで至らん。のりつるべし。中道と
つるもの。汝らも別て何道の路徑なりとも往くべし。とありし
に。美名若丸の若人ども。勇ましくして。一與ふと。公達の中
と急で入る。己まの山の頂をまわるとん。や僕ハ下道を急め。彼
や勝らん。是もや。おろし。りのと。僅つ。つ。走り。美名若丸も
中道と急せぬ。小。峡道の滑る。芝生の上と。強く踏める。人知ぬ。
つ。ま。けん。茶。茶。の。結。と。切。せ。ぬ。ひ。と。い。ふ。と。幸。う。て。平。地
る。あ。く。下。り。ま。ぬ。ひ。ふ。不。圖。も。神。被。姫。の。体。ひ。在。と。あ。て。相。互。に
見。着。し。ぬ。顔。を。せ。す。怕。羞。し。と。幸。う。が。い。ん。公。達。ハ。その。ま。よ。り。で

